

## 北満の記録(一)入隊

村川 武雄

この記録は、私が二十歳〜二十五歳までの青年の時期(戦時中)そして軍隊時代、また終戦近い八月、北満国境地域の状況、ソ連の不法進撃による、開拓移民団の悲劇、その頃、敗戦国の捕虜として入ソし、過酷な労役に服し、酷寒とノルマに追われた生活を、記したものである。

また、帰国の喜びとその陰の苦労、帰郷までの様子を書いてみたが、過去の思い出にしても、あまりにも数多く珍しい体験である。今後二度とあつてはならないことだし、また起きないであろう。

「苦労は若いうちにせよ」という諺があるが、あまりにも大きすぎた若き日の体験であつた…。

### 徴兵検査(成人式)

終戦の年まで二十歳になつた若者には国民の義務としてこの徴兵検査があつた。(戦後の成人式である) 徴兵検査を受けて始めて一人前の男として認められ、酒も煙草も、人前で大つぴらに飲んだり、吸つたり出来たのである。

これは日本男子である以上、平時であろうと、戦時であろうと、残らずこの検査の関門を、通らなければならぬ厳しい道であつた。

軍人を志すものに登龍門として、幼年学校があり、小学六年生より試験で入学する。また十八歳で志願の道があつた。いずれも職業軍人としての道であつた。

徴兵検査は、各都道府県支庁管内で行なわれた。夏期に検査が行なわれ、八月末〜九月の入隊が普通であつた。

検査に合格すると、薄桃色の用紙の入隊通知が来る。検査の結果、甲種、乙種、丙種合格の別に分けられ、平時であれば、甲種合格者のみ入隊通知が来る。乙、丙種は予備兵として、一年〜三年に一回、地方市町村別に地方連隊区の指導の下に、退役軍人が指導者として二・三日間の宿泊訓練がなされる。

場所は小学校が使われ、夏休み期間中に実施するのが、普通であつた。現役の将校、下士官兵が付いているので、手抜きなど出来ず、厳しい訓練風景であり、秋には隣接町村との対抗演習なども行なわれ、空砲を撃ち実戦さながらであつた。

実弾射撃も毎年行なわれていた。当時、陸別町は釧路支庁管内であつたため、釧路連隊区の管轄にあつた。当時、徴兵検査は支庁別に施行された。

当時の進学は、小学校六年卒業から試験を受けて、中学校(五年)農林学校などへ進む、普通ほとんどは高等科へ進み二年で卒業、と同時に上級学校(師範学校、各専門学校、大学)へ進む者もいた。ほとんど土地の金持や知名人の子供であつた。少々成績など中位でも入学したようである。

上級学校はほとんど都市にあり入学すると下宿がつきものである。進学しない者は家事手伝いか就職をする。働くところはいくらでもあつた。

官庁就職は試験と、知人の依頼が殆ど就職をしながら青年学校へ入る。毎日の夜間と日曜日、若干の学科と、世界状況、軍事教練などがある。年に一度実戦さながらの野戦訓練もあり、徴兵、入隊の予備訓練の

場でもあった。

徴兵検査は管内二百〜三百名位の人を一日で終了させるので大変である。

昭和十九年七月 陸別町から七十数名が行く。場所が弟子屈町なので、前日に出発し泊まる。

陸別駅集合で町役場の兵事係と青年学校の教官に引率され出発。行き帰り二泊三日である。陸別町は終戦後、釧路支庁(距離的に遠い)から十勝支庁に編入替えとなる。

検査当日は早朝起床、検査会場まで徒歩三キロメートルの道だ。八時検査開始なので、三十分〜一時間前までに行つて、準備をしていなければならず、大、小、の便も済ませていなければならぬ。当日の体調、不調など理由にならない。

釧路連隊から現役兵、下士官が補助検査官として、また指導官として来ていて、彼等が殊更に厳しい。軍隊では普通なのだ。一挙手一投足に至るまでの、小さなミスも見逃さず、今まで味わったことのない緊張感だ。

各町村が順次行なわれる。始まつたら全く猶予がない。二十〜三十名が始め、運動場(野外)に並んで運動(手足)検査から始まる。(一回説明して、直ちに実施だ、一言でも聞き漏らしたら大変だ)

緊張すればする程、失敗が多くなる。二言一言が怒鳴るように聞こえ、失敗の連続。

屋内(教室)に入り、全裸となる。前に一尺角の布を下げるだけ。検査箇所は一番から順次進む、入ると四・五人ずつ検査要領の説明を受け、順次奥へ進む、全く無駄のない行動であり、私語も出来ず、要領説明はすべて一回だけで、若干の質問を受け終る。

後は、前のものが検査を受けている順序を、間違えないようによく見ていることだ。二回ぐらい順序を間違えると組の一番後ろに回される。

検査官は一言も言わず、受けるほうが順序によって行動し、検査に支障のない動作体制をするのである。

検査官の前で名前を告げて、動作に入るのだが、ここで硬くなつては、前に説明を受けた通りに、出来ないものも出る。仲間に聞くことも、話すことも駄目なので、他の者の動作を見て知るのみ、すべて要領よく、元気に行動すれば、「よしっ」とほめられ無事通過するのだ。

十箇所ぐらいある検査場を、この要領でするので大変なこと、下手に失敗が続くと、要らぬところまで調べられてしまう。(軍隊の要領を本分とすべしはもうここから始まっている)

二百人以上の人の検査を、午前八時から午後二時頃までに終り、引き続き査定発表が行なわれるのだから、その検査の早さに感心させられる。

これで、甲、乙、丙種に分別されるのだから、人間も哀れなものである。三・四時間程で検査の全行程が終る。

服装を整え遅い昼食をとり、運命の発表を待つのである。午後二時から発表である。

検査官は南葉大佐と言って、当時「鬼の南葉」といわれていた厳しい人である。ここで、若干の質問と検査結果の発表がある。質問の内容で自分は何の方面に行くのか見当がつく。

中央上段に口髭を付けた軍人がおり、左右に支庁長、町村長の他多数が居並ぶ。威厳があり今までのところより、空気がピンと張り詰めた感じで、一人ずつ番号順に呼ばれ、中へ入る。

番号と名前を元氣よく言つて、検査官の前へ出る。大佐より二・三の質

問を受ける。何を問われるか分からない。

大佐の前にある書類には、身元調査、学歴は言うに及ばず、素行から家族の状況、職業、すべての調書があるようであった。

聞かれた内容により、よくこんなところまで調べてあるなあ…と思う程である。

大佐の決定、そして命令は天皇の命令である。大佐より「甲種合格」と言われ復唱して退く。

その場で、甲種合格、乙種合格、丙種合格の三段階で、検査結果を選定し、発表命令されるのである。

平時であると甲種合格者は、三〇五割程度といわれた。しかし戦時ともなると、六〇七割の甲種合格者が出る。戦雲急なる時はこの乙、丙なる者も、多く召集され戦場へ送られた。

甲種合格者は後日、入隊場所と日付時間を指定した通知書が送付されてくる。戦時この紙切れ一枚で運命が決まってしまった。俗にこの紙切れ一枚のことを赤紙といった。

検査が終わり、宿舎に帰ると、甲種合格者は共に喜び、乙、丙の者はシユンとなり、話の輪に入ることが出来なかった。当時、甲種合格になることは、男の誉れであり、家族の自慢でもあった。

戦時甲種合格で息子を兵隊に出す親の気持ちは大変だったろう、面に笑みを浮かべ心で泣いて見送った姿が思い出される。

当時、二十歳以下は未成年として扱われ、酒、煙草はのんではならぬいとされていた。しかし一般ではのんだりふかしたりする者は多くほとんど隠れた行動であったし、他の先輩たちも見てみぬ振りをしたり、勧めめる人もあったほどである。

だが、この検査近く、また検査当日は当然駄目であり匂はもちろん煙

草の「ヤニ」は指先からすっかり落としておかなければならない。当時の煙草はヤニが強く指先がニコチンで黄色くなるのが普通であった。

ほとんどの若者は酒も煙草もたしなんだ。検査場では、聞かれても、のんでいません…で通るのである。検査官はのんでいるか、いないかは一目で分かるらしいが…。

もう一つは女性関係である。遊廓が全国至る所にあつた時代、小さい都市や田舎などちよつとのもで毛ジラミ、淋病などをもらつてくる若者もあり、若者の多い軍隊では、これらの伝染が一番心配でこの検査は特にうるさく厳しかった。もし疑いがあれば、再度、再々度検査され、淋病などに罹っていると、丙に落とされる。兵役を逃れるために、わざと感染する者もいたので、このことの検査は、殊の外厳しくした。

検査が終ると、甲種合格の者と乙、丙の者との進路は、はつきりする、乙、丙の者は業務に精を出し、甲の者は入隊まで、仕事のこと、身の回りの整理をし、思い残すことのないよう、友と日々を送る。

昭和十九年、甲種合格となり入隊することは、戦地へ行くということであり、各地で敗戦、玉砕が多く敗色が濃くなってきたときで、生きて帰ることのできない戦況であったのだ。しかし当時の若者は生死のことなど考える者は、誰一人いなかった。

国民皆兵、一丸となった時代、戦地で死ぬことを誉れとしていた。戦時教育・指導の徹底は恐ろしいものである。

昭和十九年の七月、八月は例年にない暑い目が続いた夏であった。

日中の仕事を終わり夕方から毎晩友と楽しく語らい、歌い遊んだ。死地へ送る若者に対する公認の時間であったのだ。元気に任せ少々無理して遊んだせいで、少しの風邪だったがこじらせてしまう。しかし、体したことでもなく、薬を飲んで仕事を続ける。

ある日勤務中に、ひどい発熱を起こす、立つて居られない状態となり、すぐ町の病院へ行く、肺浸潤の疑いありと言われ、母も心配して北見の大きい病院へ行くように勧めてくれた。いつ入隊通知が来るか分からないのだ。

次の日、北見日赤病院へ行く。病名は同じであった。医者に入隊のことを話すと、先生も心配をして、それでは早期に治るようにと治療法を考えてくれて、仕事をしながら一日おきに北見の病院に通った。

## 入隊通知

病気も大分よくなって来た九月七日、入隊通知が来る。入隊は九月二十日、旭川師団野砲連隊である。

医者に相談した。毎日病院に通い診療した甲斐もあり、「もうこれで大丈夫だ」と医者に言われ通院を止める。九月十五日であった。

九月十六日以降出発までは知人鮎刑威の挨拶回りや壮行会など身の回りの整理に追われる。故郷に思い残すことの無きよう、心の整理も。

九月十九日 午後一時の列車で出発。

姉兄たちが、皆他から集まっているので、我が家は久々に賑やかだ。午前「国民服」を着て、腹には千人針の布を巻き両肩には「日の丸の寄せ書き」をしたものを掛け、立派な若者の晴れ姿で知人、先輩、近隣者に出発の挨拶回りである。一つには晴れ姿を見せるためか。(田舎なればこそ)

「今日元気でいきます。皆さんもお元気で」この言葉だけ。行きますとは、行って帰らないということ、当時、行って来ますとは言わないのが兵隊に行く者の慣わしであった。

出発一時間くらい前になると、町内会や国防婦人会の人たちが、大勢集まり家の前から、列車の出発まで見送る慣わしである。(大東亜戦争以前は、入隊、出征一週間前から知人や、親戚から贈られる布の職「祝出征〇〇〇君」と書かれたものが何本も立てられ、それを持って駅まで送る行進は、若者の夢であったのだ。)

家を出てまず神社に行き、お祓いをして駅に行く。明日九月二十日は神社の秋祭り宵宮で大勢の人がその準備で大変であった。

駅には、多くの見送りの人々が集まり、また挨拶が大変。駅に着くとひとしきり歓送の軍歌が歌われ別れを惜しむより、怒号のような歌声に、送られる者も、一緒に歌う。

発車のベルが鳴り出すと、歌声とバンザイの声で、近くの話し声が聞き取れない。列車は発車し徐行しながら少しずつ速度を増す。心得たものだ。

一緒に出発した人は他に三人。列車の中とホームとの歌による歓呼の呼応だけ。別れはただ互いに手を固く握りしめ、無言の別れである。街や山が遠くなるにつれ、これが故郷の見納めかと思うと、寂しさが込み上げてくる。

途中、瀬川駅まで父と姉が同伴見送ることとなる。釧路発の軍用列車が、止若駅ホームに滑り込んでくる。止若駅(現幕別駅)より乗車する。長い臨時列車である。

薄暗い中初めての駅前、そして人の波、親子の別れを交わす間も無く人込みの中に押され、自分の部隊番号の集合場所を探すのがやっと。

下士官は、自分の人員を掌握すると、「俺について来い。はぐれるな。」の一言、着いた所が旅館だ。一時の休憩だ。

駅前の人込みで度肝を抜かれ、また兵隊に怒鳴られて、気も高ぶり

「寝ろ」と云われても寝るどころではない。

これからのことがますます心配になる。父と姉が無事に帰途についたかそれも心配だった。

八時までに部隊に入り入隊の手続きをしなければならない。持ち物は奉公袋一つ。入隊通知書、他若干の書類と洗面道具だけ。

### 入隊（旭川）

昭和十九年九月二十日。いよいよ入隊当日。

係の人に連れられ、旭川七師団、野砲連隊の営門を潜る。これで「シャバ」（一般社会）ともお別れだ。

時間と厳しい規則に縛られ、厳しい訓練が待っている。七時三十分頃より練兵場に集合となる。

驚いたことに名前と番号で呼ばれ各班に分けられる。いつの間に、これだけの人がどこから入隊してきたのか、三百〜四百名の人である。此処で初めて分かったことであるが、今入隊した我々は、みな旭川連隊に入隊したのではなく、満州佳木斯（チャムス）師団八二四部隊（山砲部隊）へ入隊なのである。

満州部隊から兵員受領に沢山の将校、下士官が来ていたのである。

旭川部隊は仮の受領場所にしか過ぎなかったのだ。

各中隊別に分けられ、軍曹の指揮に入る他に下士官が一名位、班は八十数人である。その他上等兵、兵長、伍長、が計五名、軍曹の紹介があり、自分たちの班の人を早く覚えるようにとのこと。とはいえ軍服を着ると皆同じに見えてしまう。階級を見て判断するだけだ。

一週間から十日各検査と渡満準備のために当部隊に居るので、まず仮

の宿舍である。野砲部隊は砲を馬で引くため追馬場という室内のドデカイ建物があり、内部ががらんとした砂地の屋内馬場であり、そこに足場を組み、板を並べムシロを敷いたところであり、まさしく馬並みである。いや毛布があるだけ少し良い様であり、食事はバケツで運ばれ分けられる。次の日から順次体格検査という徴兵検査よりも厳しい検査が行われ、班長の身元調べなどもあり、時間がかかりまたうるさい。予備時間は体操をするので暇など全くない。たまに食事の後など、

「俺が見ているから、全員昼寝しろ」といいところを見せる。

命令だから眠くなくとも、横になつてじつとして居る。検査も普通何もなければ、一回で通過するがちよつとでも疑問な点が出ると何回でも調べられる。自分も軍医の検査で腕に多くの注射の跡があるので、どうしたのかと聞かれ、出発近くまで肺浸潤で病院へ通っていたことを話すと、検査の仕直しとなり、同じような検査を毎日やられる。今日この検査で同じ病気の者が、五名いたが自分一人が再度検査である。

今度は陸軍病院へ行って検査とのこと。軍曹から「陸軍病院まで行くようなら、だめかもなあ」とのこと。やはり自分の班から一人でも、兵隊を少なくしたくないのである。後日、検査係にうまく頼んだようだ。

最終、陸軍病院へ行き、診断の結果病院へ行った五名の内（他班から四名）即日帰還は私一名だけ、四名は残された。助かった！無事入隊することが出来たのだ。

出発二・三日前から、今度は次々予防注射をされる。そのため、発熱者続出して、元気な者は半数もない有様である。

甘味品もときどき支給され、煙草まで支給された。班長や他の下士官も我々に対して、弟のように扱ってくれる、班長も「俺を兄貴と違って何でも相談しろ」と言ってくれた。現役の下士官から見ると、我々は子

供のような扱いだ。

## 出発（北海道との別れ）

昭和十九年九月三十日。いよいよ出発の時が来た。秋も深まり月の冴え渡る夜であった。

昭和十二年の日支事変に始まり十六年十二月の大東亜戦争へと戦うこと七年、食糧も軍需品も底をついてきた頃であり、戦況も各地で連合軍に押し返され、玉砕相次ぎ、本土空襲で各地が焼土と化した。風雲急を告げるときである。

入隊新兵さんの輸送時の服装

- ・上下は一応軍服で兵隊らしい（代用ラシヤ服で新品）
- ・戦鬨帽はよれよれの中古品
- ・足元は地下足袋（軍服に地下足袋では様にならない）
- ・水筒の代わりに竹筒の水入れ一本
- ・雑囊の中には日用品若干に乾パン一袋（非常食）
- ・武装無し

満州チャムス師団より兵隊を受領、輸送にきた指揮官の指示により、九月三十日午後九時、旭川駅貨物ホームに集結、それぞれの部隊、中隊別に列車に乗る。

入隊者で、旭川近隣の近親者は、何処からか出発目時を入手し、会に来る人もいた。（本場に最後の別れである）  
うまく会える人もいたようだ。また会えずに名前を告げて品物を依頼

する人もいた。

月は煌々と冴えわたり、冷え冷えする、今夜もかなり強い霜が降りるだろう。

午後十時、冷えてきた夜気の中に汽笛が甲高くとどろきわたり、列車は静かに動きだす。車窓から東北の空を望む、故郷の陸別は遠く今頃家では誰かこの月を眺めているだろうか。

月空を眺めながら一抹の寂しさが漂う。車窓で眺めるこの月、日本で見るそして、北海道で見る、最後の月になるのかと思うと、しばし月と語らう：一生活れることのないよう目の中に焼き付ける。

戦況は、風雲急を告げる昨今、日本の運命は：敗戦ということは夢にも思わぬが、不安があり我々には先のこととは分からない。今はただ国のため一死報国あるのみ。我が身でできるだけ尽くすのみ。列車は特急並に突っ走る。

全員に就寝の指示があるが、なかなか寝つかれない。

一刻一刻故郷をはなれ南へ南へと進む。その内に一日の疲れが出て、線路の乱みを子守歌に深い眠りにつく。列車は一路満州へ向けてばく進する。

列車の旅は、三年前東京へ一度行っただけ、東京から西へは初めて、車窓からの景色は珍しかった。車窓から眺めた富士山も美しかった。戦争で慌ただしい世相を見下ろしているかのよう…